

『幸福を与える智慧』における国家論：ウイグル哲学の頂点における理想的国家像

ムフタル, アブドゥラフマン
九州大学大学院：博士課程：哲学

<https://doi.org/10.15017/1445829>

出版情報：哲学論文集. 49, pp.37-55, 2013-09-29. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：



『幸福を与える智慧』における国家論

——ウイグル哲学の頂点における理想的国家像——

ムフタル・アブドウラフマン

序

カラハン国（810—1212）の国家師として活躍したユスブ・ハス・ハジブ（1019—1085）は『幸福を与える智慧』において、次のように語る。

「³⁴見よ、この本はあらゆる人に有用である、特に君主達と治国者達に³⁵ 治国者の具備条件は何であるのか、哲人がこの本の中でそれを語る³⁶。何が君主に保障できるのか、国王が必要な法と全ての具備条件を³⁷ 国家の存亡の原因は何処にあるか、国家の盛衰の原因は何であるか¹」。

このように、著者は、「特に君主達と治国者達に」対して A 「治国者の具備条件」と B 「国家が必要な法と全ての具備条件」と C 「国家の盛衰の原因」を教えることを課題としていると理解できる。当時の国王は著者に「特別法務大臣」（ハジブの名はこれを意味する）という職位を与えた。

この著作は十一世紀までのウイグル民族の国家思想を総括したものであり、四人の対話によって議論が展開される。一人目は国王で、「クントウグデイ」（太陽が生まれた）と呼ばれ、二人目は総務大臣の「アイトルデイ」（月が円満になった）、それから三人目が「オグドウルミシ」（褒められる者）、四人目が「オドウグルミシ」（目覚めた者）と呼ばれる。この四人の登場人物は以下のような象徴的意味を持つ。（1）正義と法（2）幸福と幸運（3）知識と智慧（4）満足と結末である。これらの対話によって治国の方法、法と道徳による治国を中心にした政治、経済、教育、軍事、人間関係、天文学など様々な問題が議論されていく。

本稿は、『幸福を与える智慧』の治国思想の核心が君主制による法治国家であることを主題とし、国王の名前と象徴的意味としての法こそが国家の基盤であると指摘する。法によって幸福と幸運が可能になる。知識と智慧が国家に幸福と幸運を与える。ハジブの理想的国家像は君主制による法治国家である。彼は次のように語る。「821 国家の基盤は正義においてある、この国家の基盤は正義の道である 822 国王が正義によって国家を統治すれば、願望を実現できる」。111頁の「法 [Toru]」の意味は以下の引用によって理解される。「800 見よ、正義と法が私自身である、法の特性をこれらによって理解しなさい 801 私が生きているこの椅子を見よ、ああ、私の心の補助者よ、それは三本の足を持っている」。ここでの「正義と法が私自身である」のうちに、正義と法の体現者としての国王像を読み取ることができる。

本稿の構成は以下になる。第一節において『幸福を与える智慧』の先行研究を紹介した上で、現在の先行研究の状況を押さえ、第二節において国家論の内実と引き分けその国王像を検討する。それによってハジブの説く理想的国家像が君主制による法治国家（法と道徳による人民の幸福と国家の繁栄の一体化）であることが明らかになるだろう。このことは、ウイグル民族の独自の伝統文化と哲学思想^②の結晶として歴史的に、あるいは現代においても世界的に注目されるべきものであることを示したい。最後は、ウイグル民族の独自の伝統文化と哲学思想の結晶としての『幸福を与える智慧』の政治哲学を自然哲学によって基礎付けることを試みたい。

一 翻訳と出版、先行研究の状況

(1-1) 書名の翻訳

本節では『幸福を与える智慧』という書名について紹介したい。この書は、ウイグル語による一〇六九年の著作とされ、八五章、六六五四首、一三二九〇行詩によって構成される。原題は「KUTADGHUBLIK」である。まず、これをどのように理解するのが問題であり、実際に様々に翻訳されてきた。「KUTADGHUBLIK」——幸福を与える智慧という名詞が「KUT」幸福、「ADGHU」を与える、「BLIK」智慧という三つの言葉から形成される。具体的には、「KUT」は幸福、幸運、祝賀、神聖という意味を持つ。「ADGHU」は与える、差し上げる、上げるという意味を持つ。「BLIK」は智慧、知識、科学、学問という意味を持つ。これらの三つの言葉を合わせると「KUTADGHUBLIK」——幸福を与える智慧になる。⁽¹⁾

「KUTADGHUBLIK」という原題について、「幸福」「与える」「智慧」という言語上の意味以上に、このタイトルに「皇帝へ捧げる」という意味が込められていることがバルトリドによって指摘された。それゆえ、「KUTADGHUBLIK」を『皇帝への適切な助言』と翻訳しても良いと見なされる。

著作の名前について、ラドロフとその弟子マロフの理解は一致しない。マロフは、最初この長篇詩の名前は『幸福の書』あるいは『幸福を獲得するための手段』という二種の翻訳が可能だと見なしたが、後には、他の人達の翻訳を受け入れて『幸福な人間の知識』と翻訳する。ワリトワの翻訳はマロフの最初の翻訳と同様であるが、彼は副題を加えて『幸福を与える知識——支配の知識』と翻訳した。⁽²⁾ コノフ、バルトリド、ワリトワなどの見方はマロフの最初の翻訳に一致する。彼らは、そうした翻訳が修辞学的に正解である上に、いかにして完全な正義を体現する皇帝(国王)になれるかを教えるという「KUTADGHUBLIK」の基本的思想にもかなうと見なし、イワノフの『幸福の知識』という翻訳を、簡潔的で説得力を持つ

名前であるとともに、著作の基本的な思想を完全に反映し、正確であり、詩的翻訳のリズムも適切であると見なす。

(1-2) 書式と出版

世界各国々において『幸福を与える智慧』には三つの書式がある。ウイーン書式、カイロ書式、バルガナ書式である。ウイーン書式は古典ウイグル文字で書かれ、カイロ書式とバルガナ書式はアラビア文字で書かれている。一八二三年にフランスにおいてフランス学院近東諸言語教授ジョベルが『幸福を与える智慧』のウイーン書式を学術著作として初めて世界に紹介し、『アジア雑誌』において『幸福を与える智慧』に関する報告と著作の部分訳を発表し、これが現在も続けられている研究の起りりとなった。ジョベル以後は、ハンガリー、ロシア、トルコ、アメリカ等の学者達が『幸福を与える智慧』の翻訳、出版または紹介等の仕事をした。これらの中でラドロフに代表されるロシアないしソ連の学者達⁵⁾、アラティに代表されるトルコの学者達の努力が最も注目に値する。

トルコの学者達は一九四二年ないし四三年に『幸福を与える智慧』の三種の抄写の写真書式を出版する。そのうちアラティが一九四七年に出版したラテン文字の抄写による書式が最も中心的とされている。彼が長い年月をかけて三種の書式を比較して作った、ラテン文字による国際音標(音声記号)を用いて書かれた書式が、以後『幸福を与える智慧』研究を行う際の標準版となっている。これにもとづいて、一九八三年ダンコフが英語で翻訳した『幸福を与える智慧 *Wisdom of Royal Glory*』がアメリカのシカゴで出版された。

(1-3) 先行研究

『幸福を与える智慧』研究において、翻訳と出版と同様に、ロシア(ソ連)とトルコの学者達が貴重な貢献をした。一八九〇年から一九八五年までのおよそ一世紀の間、ロシアでは『幸福を与える智慧』における研究が続けられてきた。彼らは『幸

福を与える智慧』の歴史的価値と科学的価値を非常に高く評価する。コノフは一九八三年に発表した論文において、次のように書く。「『幸福を与える智慧』は道徳を解釈する箴言集である：東方地域と西方地域ではずっと昔から道徳——品格についての著作があった。：しかし、『幸福を与える智慧』はもつとも古典的で唯一の、突厥語で書かれた著作である。この長篇詩は人類の結晶を纏めた宝典である」。これは道徳を教える文学的著作として『幸福を与える智慧』を解釈する典型である。これに対して、トルコの学者達はその哲学的側面を強調する。⁸⁾

『幸福を与える智慧』はどのような著作であるのか、という問題について各国々の学者達が研究過程でそれぞれ自身の主張を語る。こうした研究状況において、本稿は、本質的に政治哲学を語る国家論であるとしてこの書を解釈したい。さらに、それに加えて、『幸福を与える智慧』の政治哲学思想の基盤として独自の自然哲学思想を紹介したい。

二 『幸福を与える智慧』における国家論

(2-1) 唯一の立法者としての国王：「正義と法は私自身である」

『幸福を与える智慧』第十八章「国王クントウグデイ(太陽が生まれた)が大臣アイトルデイ(月が円満になった)に正義の実質を語る」において、国王クントウグデイは自身について、次のように語る。

「800 見よ、正義と法が私自身である、法の特性をこれらによって理解しなさい 801 私が生きているこの椅子を見よ、ああ、私の心の補助者よ、それに三本の足が付いている 802 三本足が付いているあらゆる物は傾斜しない、三本足は直立し曲がることのできななくなる 803 もしその三本足のうちで一本が斜めになると、他の二本が斜めになって、座る者は倒れる 804 三本足が付いているあらゆる物は正確に、直立する、もし四本が付いたら、見よ、一本は斜めになる 805 もし何かが始まらずにならば、その全てが美しくなる、何かが始まらば、要するに、まっすぐになる 806 どれかが曲がるとすれ

ば、その物は歪み、あらゆる歪みは悪しき根源となる 807 まっすぐなどれかが歪んだら直立できなくなり、倒れる、どれかがまっすぐになれば倒れなくなる 808 見よ、私の品格も曲がらない、もし正義が歪んだら終わりの日となる」。

ここで国王自身によって「正義と法が私自身である」というきわめて重要な命題が語られ、正義と法の本質的な体現者として国王が捉えられている。そして、このような「法 TORU」の実質としての国王が座っている椅子の象徴的意味が語られている。ここでの「まっすぐ」という語は「誠実」という意味を含んでいる。三本の誠実な足が国王の椅子を支えている。「正義」はそうした椅子の特性から理解される。その椅子の足の数は三本でかつ「まっすぐ」である。それはそうした三本の足をもった銀の椅子とされるが、ここではその三本の足の意味を明らかにすることはできず、それが銀であることの意味も論じることができない。しかし、少なくとも三本の足の構造という図形的意味を問うことはできるだろう。第五十五章「天文学者との関係について」において、次のように語られる。

「378 認識を願ったら幾何学を呼べ、それから計算の大門が開ける…… 4382 このほか、代数方程式を学習すべきであり、またユークリッドのドアをノックすべきである」。

この引用によって、ハジブは代数方程式とユークリッド幾何学の重要性を意識していたことを確認できる。ここで、ユークリッド幾何学の視点と、国王の銀の椅子に付いている三本足とが関連すると読みたい。三点が決まればそれによって平面が形成される。二点では平面とならず、任意の四点が同一平面上にあることはきわめて例外的である。さらにそうした三点のうえで最善のバランスを保つためには、その足の特徴として「まっすぐ」であることと「平等」であることが要求される。国家の安定は物理的あるいは幾何学的基盤によって確立し、その全体によって理想的国家像が立体的に達成される。

これはハジブのユートピア思想であり、当時における最善国家論である。そこにおいてあるべき国王の姿とはどのようなものかをさらに問わなければならない。『幸福を与える智慧』における立法は国会立法であるのか国王立法であるのかという問題は、ハジブ国家論の方向性を定める。しかし、『幸福を与える智慧』に国会立法を読むことは著作全体においても部分的

にもまず不可能である。国王立法法の視点から解釈することを試みなければならぬ。散文序Bにおいて、国王の具備する条件は「公正により公正における正義である」とされる。国王が体现しているのは「正義と法」であった。「正義と法」は「公正において」可能になると考えられる。国王立法法は「公正における正義」を唯一の根拠として可能である。それでは、「幸福を与える智慧」における立法者とはどのような意味をもつのだろうか。

(2-2) 『幸福を与える智慧』における立法者

第二十八章「大臣オグドゥルミシは国王の具備する条件を語る」において、次のように述べられる。

「581 この国家のあらゆることは国王が決めるのであり、法、秩序、習慣は彼に由来する」。

ここで、「法」が国王から由来する、「法」の根拠は立法者としての国王であることが明確に示される。「唯一の立法者が国王である」ことは二重の次元をもつ。一つは、施政者として国王が国家統治の実践的首領であること、もう一つは、立法者として「正義と法」が統治の最高の基準であることである。国家の統治構造は普遍的意味と象徴的意味によつて立体的に形成される。このように、立法者は国王をおいてほかに存在しないことが明確に述べられている。

ここからの問題は、唯一の立法者国王がその権利を勝手に使つてよいのか、あるいはどういう基準によつて立法権を発揮すればよいかということである。「585 国家において誰かが高位を占めたなら、人民のために一つの良い法を作るべき」と述べられる。すなわち、人民のための法が良い法であることが明らかである。国王が人民のために良い法を作ることが立法の基準として主張されている。このことについて、次のように述べられる。

「456 法を悪く作らず、きわめて良く作る、日常生活が良くなり、幸福は最も美しくなる……」459 悪い秩序を作らず、あ
あ、哲人国王よ、法が悪くなつたら、国王にはなれない」460 その人がその時代に法を悪く作ると、自分の後に悪い名前を
残される」461 その人が良い法を制定すると、彼の名誉は永遠に生きる」。

立法者は国王である。ここで、国王が「哲人国王よ」と呼ばれることが理想的国家における理想的国王のあり方を描いている。唯一の立法者としての「哲人国王」の性質は何であるのか。国王は「正義と法」を体現しているのだから、「不正な法」とはそもそも矛盾であり、その可能性は排除される。「不正な法」は存在せず、存在するのはただ「良い法」あるいは「悪い法」である。唯一の立法者の立法する法のみが唯一の法であり、国王はそうした意味で人民の指導者である。それゆえ、指導者の特性が国家と人民の盛衰を左右する。したがって、国王は国家の死活と繋がる。国王の人間としての性格が問題になってくるのはこのためである。このようにして、唯一の立法者としての国王は哲人でなければならぬ。

第二十八章「オグドウルミシは国王の具備する条件を語る」において、次のように指摘される。「2017 見よ、もし獅子が犬の首領になったら、あらゆる犬は獅子のようになる。2018 もし犬が獅子の首領になったら、あらゆる獅子は犬のようになる」。

立法という視点からすると、国王の権威は「法と正義」を体現したものであった。ここではその「法と正義」の体現者としての国王が「獅子」であるのか、あるいは「犬」であるのかが問われている。古典ウイグル語では「獅子」は英雄、「犬」は悪の意味を持っている。ここで、一人の人間として国王の性格は「獅子」と「犬」のどちらかである。国王は英雄として国家と人民を指導するべきであり、勇気をもつ英雄の意味は獅子であるのだから、国王立法は獅子の性格の象徴的意味を前提として機能しなければならない。「幸福を与える智慧」の語る国家論において、国王は単なる行政の実践的首領であるばかりでなく、唯一の立法者としてその国家の象徴的意味をもっているのである。

(2-1-3) 司法国家…司法者としての国王

以上の通り、『幸福を与える智慧』国家論における国王は立法者としての役割をその本質とする。しかし、国王はまた司法者としての役割をもっている。司法国家、司法者としての国王について論じよう。ハジブは第三十一章「オグドウルミシが

偉大な法務大臣の具備すべき条件について国王に語る。「2023 大小の訴訟者が訴えてきたとき、招待することはハジブあるいは国王の任務にするべき」。ここで、すべての訴訟者を受け取って司法の場を開くことはハジブ（ハジブという名は法務大臣を意味する）の任務であることが明示される。しかし同時に、「国王の任務でもあるべき」ことは最終的な司法の権威者が国王であることを示している。国王の司法者としての役割とは何か。国王の司法権は法（正義）の執行が究極的に国王を中心とすることを意味する。しかし、あらゆる訴訟者が国王と付き合えるはずはないために、司法における執行権の国家的構造において、法務大臣と法務次官たちが必要となる。偉大な法務大臣（ハジブ）の任務は国王と法務次官たちの間で主な役割を果たす。「2109 彼は被圧迫者を受け取って、状況を確認していかにしてそれを解決するのかの道を教えるべきである」。この引用によって、訴訟者に関する仕事は法務大臣の仕事であることが確認される。しかし彼はその権威を国王に依っている。国王は立法者であるばかりでなく司法者でもある。本稿は国王自身の言明「正義と法は私自身である」のうちに『幸福を与える智慧』における国家論の核心を読み取ったが、国王が正義と法の体現者であることの意味は立法の領域だけにとどまらず司法の領域にも及んでいるのである。

二 『幸福を与える智慧』における政治哲学の基盤としての自然哲学

(3-1) 四元素論

『幸福を与える智慧』は人間の価値と社会的幸福に関する政治哲学の問題を中心的な主題とする。本節は自然哲学と政治哲学の関係を考察したい。というのも、この書は自然哲学によって政治哲学を解釈し、自然と社会の根源的法則の統一性によって理想的国家像を構想しているからである。第六〇の二行詩において、次のように語られる。「これらの四人の同伴が私にとって四つの要素のようである。四つの要素が確実に対応すれば、生命が構成される」。ここで四人とはイスラムの歴史

的な四人のカリフのことであり、四つの要素とは、土、水、気、火である。ユスブ・ハス・ハジブの考えによると、人間精神とこれらの四要素との「確実的対応」が生命にとって重要であるとされる。ここに彼の思想における自然哲学と政治哲学とのある種の類比関係を見てとることができるだろう。彼は自然と精神をどのように考えていたのだろうか。ハジブは、四元素について次のように語る。

「43 三つは水、三つは気、三つは火になった、三つは土になって、これらによって世界が構成された」¹⁴ これらは互いに敵対している、敵を敵によって抑えて、闘争から避けた」¹⁵ 敵対しているこれらの双方が調和し、憎しみを解消したので闘争はしない」

この引用によると、世界構成の物質的基盤は四元素であり、四元素は自然世界の矛盾と統一の基本要素である。さらに、『幸福を与える智慧』は、四元素を、人間の構成、四つの季節、四つの性格、健康と病気、そして社会現象などの自然的基盤として見なし、「四つの要素」の相互矛盾と統一によって、人間の精神状態を解釈するべきであるという古典的見解を論述している。ハジブは、四元素論によって哲学、天文学、医学、人間の生理学的諸問題などをも解釈し、それによって社会的諸問題の解決を試みるのである。¹⁶ こうした四元素論に自然と人間精神についての彼の生成発展観を見てとることができるだろう。

「566 人間の自然は四つの対立する要素から形成される、ある一つが笑わせ、もう一つが面倒を引き起こす」¹⁷ 見よ、ある一つが荒っぽいのであれば、もう一つは穏やかさを求める、ある一つが笑わせれば、もう一つは絶えず涙を出させる」¹⁸ 快樂の時は苦痛をもたらす、悔しい時は快樂を持つてくる」。

ハジブが人間を自然の一部として解釈するとき、四元素の関係の変化によって発生するのは、自然の四つの季節だけでなく、少年、青年、成人、老人という人間の四つの発展時期でもあることが、明確に主張されている（4620¹⁹、4629）。「幸福を与える智慧』において、四元素論は自然と人間精神についての基本的な生成発展観である。

(3-2) 運動、矛盾と生成発展観

『幸福を与える智慧』において注目し値するもう一つの重要な哲学的観点は現象における矛盾と闘争である。「1053 調和的な四つの要素の間で闘争が発生し、一つの要素が勝つて、他の三つの要素を克服した」。

ユスブ・ハス・ハジブは、矛盾と闘争を世界発展の根本起源とはしないが、四元素によって保持される世界の陰陽二元論的な生成発展に関わるものとして位置づけている。そして、このような矛盾と闘争は、天体から人体まで、さらに自然世界からさらに人間の社会構成にいたるまで、最も普遍的な現象として考えられる。

ハジブの矛盾と闘争観に対しては、古典ウイグル及び中央アジアの伝統哲学思想が影響を与えたと考えられる。彼は『幸福を与える智慧』の2249-1と2250-1において、矛盾 (YAGHI 敵、QARSHIMA 敵対、OCHESH 憎しみ) について、次のように語る。「2249 善と悪が互いに合わなくなる、直と歪みが合わなくなる 2250 夜は昼を好まない、清水は烈火を仲間としない」。しかし彼は矛盾の本来的な統一性を主張してもいる。彼によると、互いに矛盾及び闘争する宇宙と自然は神 BAYAT の秩序のもとで協力しあつて存在し運動する。「170 万能の神がそれらを軌道に入れて、またそれらを創造して、秩序正しく協力しあわせた」。

宇宙の秩序について、第五章『七つの惑星と十二星座について』において、特に自然の運動と変化を主題として、次のように述べられる。

「26 見よ、青空はいつでも回転するように創造された、生命もそれに従って絶えず回転する」。

これは現代ではもはや通用していない古い天動説であるが、それによると、恒星を除いてあらゆる星は月を含めて位置を変化し続ける。星座の変化によって季節が形成される。上昇と墮落、夜と昼、生成と消滅などが互いに変化するという不連続の回転性が宇宙の秩序である。物質だけでなく生命 (特に人間の生命) もこのような回転のもとに置かれているとされていることに注目しなければならない。⁽¹²⁾

「1086 誰かが生まれたら、死亡するはずである、何かが上昇すれば墮落するべきである 1087 上がるものには下がりがあ
る、上がるもの下がりがあ、賞与には苦痛が付く、辛いには甘いが付いて行く」。

ハジブは、陰と陽が生まれること（生成）と死ぬこと（消滅）の相互変化を普遍的变化の実例としてあげる。

「1049 輝いたものの消え去れる時がある、歩行者の止まる時がある、上昇したものの落下する時がある。1050 万物すべて
が円満を求める、円満に達成するとき消滅に転換する」。

先に序において紹介した『幸福を与える智慧』の四人の主要登場人物のうち、大臣アイトルデイ（月が円満になった）は
「幸福、幸運」の象徴であった。月には満ち欠けがある。はじめは小さく、段々と満ちていき、円満になってからまた逆転し
て小さくなる。『幸福を与える智慧』における「幸福」（＝善き国家体制の実現）も同様であるとの解釈も可能かもしれない。

『幸福を与える智慧』において、運動、変化と発展観は、古いものに代わって新しいものが入れ替わるといふ観点である。
ハジブは自身の思想についても、次のように語る。「○○ 絶えずに変化し続けるのは私の欠点ではない、ただ自分に新しいも
のを選んでいくわけである ○○」あらゆる古い物は好ましくない、見よ、好ましくないものが負担になって人生を嫌悪させ
る ○○ 新しい物があつたら、古い物がどうして必要とされるのか、精選品があつたら、悪い物はどうされるのか ○○ 見よ、
あらゆる美味しさは新しい物のなかにある、人間はその美味しさを求めて非常に苦しむことができる」。

『幸福を与える智慧』において指摘された「新しい物」としての創造性の優先とその「新しい物」の発展における先駆的な
役割についての優れた観念は、ハジブが社会変革及び民衆の意識改革の主張者であつたことの表れである。我々は彼のこの
ような主張に真の美は新しい創造であるという意味を見てとることができるだろう。

結

『幸福を与える智慧』はウイグル民族の哲学倫理思想において代表的な古典著作であり、理想的国家像を主題とするユートピア論である。本稿では、A 国王の象徴的意味である「正義と法」、B 大臣の象徴的意味である「幸福と幸運」、C 大臣の息子の象徴的意味である「知識と智慧」、D 大臣の友人（宗教的兄弟）の象徴的意味である「満足と結末」等の相互関係において、君主制による法治国家がハジブの理想的国家であることを論究した。正義による法が国家の基盤である。人民の「幸福と国家の繁栄」との一体化がそれによって実現される。「幸福と幸運」は一時的なものであつて永遠的なものでない。本当の意味での「幸福」を獲得するためには「智慧」が必要であると主張される。『幸福を与える智慧』は、そうした「智慧」の本質を法思想のうちに捉えたのである。

こうした地平において本稿では、『幸福を与える智慧』において「智慧」が与える「幸福Ⅱ国家」を語ることができる。『幸福を与える智慧』は本質的に幸福国家論であり、政治哲学を語る叢智の書として読まなければならない。もちろん、ユスブ・ハス・ハジブは三権分立などをまったく構想していない。彼が理想とした君主制による国家像は確かに現代においてひどく古めかしくものと思われるかもしれない。しかし、本稿が示した「幸福Ⅱ国家」というアイデアは、現代世界においても価値があるのではないだろうか。

ユスブ・ハス・ハジブは『幸福を与える智慧』において、宇宙の起源とそれの社会的人間との関係、物質的世界と精神の諸現象など哲学の根本問題とも取り組んでいる。彼の思想は、当時の宗教的封建的特徴の色濃い現実を継承しながら、イスラム思想に伝統的な汎神論的思想を受容しつつも、中央アジア哲学思想において新しく画期的なものであった。というのは、智慧は単なる宗教ではないからである。こうした彼の思想において、哲学は単なる「神の教えとしてのいわゆる神の言葉」

ではなく、運命は単なる神の意志ではなく、本当の世界というのは単なる永遠世界としての「あの世」ではなく、幸福というのはいわゆる天国のことではなく、結末というのとは終末の日の問答ではない。「幸福を与える智慧」において取り上げられる「二つの世界」^③「両足で歩んで、両手で掴む」^④などの見解は、現実的生活（この世における幸福）を強調し、この点でスーフィズム神学と対立する。彼は「現実世界における生命問題で、生命のための闘争などの諸問題において、宗教の迷信者にならないように警戒し、現実世界の措置を宗教的信仰のために犠牲にしないように呼びかける」（イワノフ）にもかかわらず、永遠世界としての「あの世」に関する神話も拒否されず、むしろ調和される。「幸福を与える智慧」は、現実的幸福と天国（この世とあの世）を調和する様相を持っている。こうした状況の背景には、イスラム教を受容したばかりの当時の精神分野における、スーフィズム思想（これは中近東で台頭しはじめ中央アジアにおいても封建上級階級の宗教的過激派によって支持されることで大きな影響力をもった）の重い圧力があつた。ユスブ・ハス・ハジブは、現実世界において幸福（＝善き国家）を実現するという政治哲学の問題としてそれを受け取り直すことによって、ウイグル民族の思想伝統の礎を新たに築いたのである。

註

- (1) ユスブ・ハス・ハジブ著、新疆ウイグル自治区社会科学民族文学研究所編、『幸福を与える智慧』、北京民族出版社出版、一九八四年（現代ウイグル語）。アカデミー版としての『幸福を与える智慧』による引用は、Prof. Dr. Reshid Rahmeti Arat の原文を用いた。各首詩の番号はその原文に基づく。イスタンブール、KABALCI YAYINEVI 出版社、二〇〇八年七月（トルコ語）。
- (2) オマル、イミンらは、東洋ルネサンス時代の主要な一部としてのウイグル哲学を語る。「東洋でのルネサンス PeHeCaHuc とりわけ中央アジアでの文明のルネサンス時代は歴史的文献によれば、西洋ルネサンス時代より早速始めて、影響を与えたことが研究結果によって明示される」（「幸福を与える智慧」研究Ⅲ、シャリピディン・オマル、「東洋ルネサンス時代文学の指導者ユス

プ・ハス・ハジブ」、カシユガルウイグル出版社、一九八八年六月、二二〇頁参照。「ウイグル哲学史研究の根本的任務は東西洋交流史で結合されたシルクロード文明機構からのウイグル民族の世界観とその内実と外的な影響力を研究することである」(アブドウシユクル・ムハンマド・イミン、『ウイグル哲学史』、新疆人民出版社、ウルムチ、一九九七年八月、一一二頁)。「バゲダツドから始まったギリシア哲学と自然科学を学習する運動がヨーロッパルネサンスより七世紀前に始まった最初のルネサンスになっていた。東洋のアリストテレスであるフアーラヴィイはアリストテレスの大抵の著作に解説を書いた。特に、ピトロミ、ユークリッド、ボルファイリ、アフロッドテキス等の著作に解説を書いた。プラトンとガリンの著作について論究した。フアーラヴィイの仕事にイブン・スィーナーが続いていた」(同書、六六頁)。

(3) ロシア(ソ連)の学者ラドロフ、トムソン、キレミスキなどが、これらによって KUTADGHUBLIK を「幸福の知識」、幸福を与える知識、『幸福をもたらす知識』、「人間を幸せにする知識」、『智慧者が幸せになる』などと翻訳し、ハンガリーのワンペリによるドイツ語訳、トルコのコプルルによるトルコ語訳などは、これをよりシンプルに「幸福の知識」と理解する。

(4) トルコの学者カブソグレルは「我々の文化史における KUTADGHUBLIK の価値」という論文において KUTADGHUBLIK を『統治の知識』、『統治支配の知識』、『国家教説』、『国家統治を獲得する知識』と、マフストは『法律宝典』と翻案している。

(5) ラドロフは一八九〇から一九一〇年の二〇年間に、ウイーン書式、ウイーン書式の抄写、カイロ書式、『幸福を与える智慧』のスラビアン文字での書式とドイツ語翻訳とを出版する。アラテイの比較した書式を基盤とするイワノフの翻訳は今までもっとも完全なロシア語翻訳となっている。一九八〇年から一九八三年までソ連の学者達は「幸福を与える智慧」のアザルバイジャン語とカザフ語の翻訳の一部分を発表した。

(6) バルトリド、マロフ、トゥグシエワ、コノノフ、イワノフ、ワリトワ、ピラゴフ、ステブレワ、ナスロフ、ベリテリス、キルクリイ、ワリドゥ、テニシエウ、マフロノウ、ソルタノウ、マフモトウ、ケリモフ、ムタリポウ、ムサバイエウ、クリシノウ、ムルタザイエフ等の学者達が登場する。

(7) ラドロフは『幸福を与える智慧』の出版の前置きで書いた「古代ウイグル問題について」において、カラハン帝国がイスラム教を信仰してからの文化史と思想史研究における「幸福を与える智慧」の重要な意義を指摘している。ラドロフの弟子であると同時に学術継承者であるマロフは、『幸福を与える智慧』の二つの序はハジブ自身によって書かれていない、それは他人の作品であ

る、あるいは著者が他の著作のために書いていたというある人達の見方に反対して、「古代突厥語での文献」という論文において、次のように語る。「文法的な形式の方面で、あるいは文の構造の方面で、あるいは語彙の方面において、全ては私の見方にしていない、私は全ての著作を完成したユスブ・ハス・ハジブ自身がこの序を書いたと思う」。

- (8) アラティは自身の翻訳した『幸福を与える智慧』第一巻の前置きにおいて、次のように語る。「幸福を与える智慧」は事件を記述する歴史著作ではない、あるいは地域、都市を描写する地理著作ではない、それとも宗教人士達の行動を纏めた専門論集でもない、ある哲学者の観点を基本とする哲学者著作及び賢明人の箴言によって人々に忠告する著作でもない……。ユスブ・ハス・ハジブは人生の意義を分析する、人間の社会と国家におけるの義務と任務を提示する広義での哲学著作を書いた哲学者または科学者である」。トルコのもう一人の学者マフステイは『幸福を与える智慧』は突厥語で話す諸民族人民の「長い世紀からの道德、思想と法律観の結論である」、「国家機関、政治法、社会的道德についての探求」と見なす。ドイツの学者オルブリッジは「幸福を与える智慧」はアラビア哲学者イブン・スィーナと古代ギリシア哲学者アリストテレス思想の影響で書かれた著作である」と捉え、トルコの学者コブルルはこの見方に賛成し「イブン・スィーナの影響がもっとも深い」と語る。

- (9) 『幸福を与える智慧』において TORU という語は二三箇所使われている。ウイグル民族の歴史文献によると、TORU はオルフン川の建国された突厥とウイグル統治法律制度の普遍的な呼び方である。それは、法律、権力、法則、習慣などの意味をもつ。「幸福を与える智慧」において記述される TORU は抽象的な概念でなく、それは当時代において独自の具体的な意味をもっていた。ハジブは「法律」を TORU、「法則」(習慣法則)を TOKU と名づける。TORU は治国のために制定された強制的対策を示し、TOKU は生活に関する習慣法則を示す。TORU と TOKU についての記述は第5章において中心的に述べられる。

- (10) たとえば、次のように語られている。「3725 下方は褐色の土地と碧色の水、上方は透明な気体と火である 3826 彼は冷たさと熱さ、乾燥と潤いを相互に合わせて——互いに許して、人民に給養を与えた」。「4632 私は君に姿態について明確に語る、それは黄色、白、黒あるいは紅である。4633 これらの一つはもう一つの敵である、これらの色によって、敵を分別して下さい」。

- (11) ハジブは、たとえば土と水の矛盾から統一することを「3212 褐色の土地と碧色の水が協力しあい、無数の花が咲けて笑っている」と言っている。

- (12) 人間の幸福と不幸の回転性についても、次のように語る。「3550 見よ、賞与 SOYUNCH の終点は苦痛 SAQINCH である、苦痛の

- 終点において賞与が来る。365] 頂点が賞与であれば根底は苦勞である、頂点が苦勞であれば、後で来るのは幸運である」。
- (13) 「147 もし誰かがあの世で善の場所を狙ったら、二つの世界を破壊しないように」「194 もし人間の品格がおとなしくなったら、二つの世界で、輝いた暮らしを過ごすことができる」「432 君がもし二つの世の国王になりたかったなら、最高の基準はこれらの五つのことに絶対抵触しないで下さい」「169 最善の国王は、二つの世界でも人間にとって有利なのは、優良な性格である」163 人間の品格がおとなしく、性格が誠実であれば、二つの世界でも幸福に生きられる」「973 二つの世界のものを獲得する人は、とても幸せになり、幸福の星が彼を照明する」。
- (14) 「368 握手するために両手が与えられた、一つはこの世に、もう一つはあの世のためであった 369 歩行するために、二つの足が与えられた、一つではこの世を踏む、もう一つではあの世を向かって行く」。

参考文献

- 1 ユスフジャン・アリ『ユスフ・ハス、ハジブの法律思想』(JOURNAL OF KASHGAR TEACHERS COLLEGE (Social sciences Uighur Edition), カシユガル、一九八九年第五期(総第四一期))
- 2 アブドゥレヒム・オトウクル『ウイグル人民の一一世紀偉大な思想家哲学者詩人ユスフ・ハス・ハジブ』、新疆大学学报(哲学社会科学版) ウルムチ、一九八二年第一期(総第九期)
- 3 イスラムジャン・シエリブ、アブドゥケリム・ラフマン『ウイグル哲学史についての諸問題』、カシユガルウイグル出版社、カシユガル、一九八一年六月
- 4 アブドゥシユクル・ムハンマド・イミン『ウイグル哲学史』、新疆人民出版社、ウルムチ、一九九七年八月
- 5 ユスフジャン・アリ・イスラミイ『ユスフ・ハス、ハジブの法律思想における研究』、ウルムチ、新疆社会科学研究、一九九四年第一期
- 6 サマド・ヘヴィル『ユスフ・ハス・ハジブの世界観』、新疆人民出版社、ウルムチ、一九九九年一〇月
- 7 ユスブ・ハス・ハジブ『幸福を与える智慧』、新疆ウイグル自治区社会科学院民族文学研究院が出版準備、アブドゥレヒム・オ

- トウクル、アフマト・ズヤイ、ムハンマド・イミン・ユスブ等詩的解説を制定、北京民族出版社出版、北京、一九八四年五月
- 8 ヤルモハメッド・タヒル、Yusup Has Ajiys Idea of the Construction of an Incorrupt Government, JOURNAL OF XINJIANG UNIVERSITY, ウルムチ、一九九五年第二期
- 9 新疆社会科学研究所、一九八六、第四卷
- 10 イスラムジャン・シリブ、アブドゥケレ、ムラフマン『ウイグル哲学史における諸問題』一九八九年五月
- 11 『幸福を与える智慧』からの引用は、Prof. Dr. Reshid Rahmet Arat のアカデミー版 KUTADGU BILIG の原文が用いられた。各首詩の番号はその原文に基づく。イスタンブール、KABALCIYAYI NEVI 出版社、二〇〇八年七月（トルコ語）
- 12 ユスブ・ハス・ハジブ著、新疆ウイグル自治区社会科学民族文学研究所編、『幸福を与える智慧』、北京民族出版社、一九八四年五月、（現代ウイグル語）
- 13 英訳は以下による。Robert Dankoff Yusuf Khas Hajib, *Wisdom of Royal Glory* (Kutadgu Bilig), The University of Chicago Press, 1983, Chicago.
- 14 ドイツ語訳は以下による。Hermann Vambéry, *Uigurische Sprachmonumente und das Kutadgu Bilig*, 1870.
- 15 中国語の翻訳は以下である。郭関中、張宏超、劉賓『福樂智慧』北京民族出版社、一九八六年一〇月、北京
- 16 ユスブ・ハス・ハジブ『幸福を与える智慧』に関する研究文献、論文集
- 17 アブドゥシクル・ムハンマド・イミン、『幸福を与える智慧』の宝庫、新疆大学出版社、一九九九年八月、ウルムチ。
- 18 ユスブジャン・アリ・イスラミイ『幸福を与える智慧』と法律、新疆人民出版社、一九九三年二月、ウルムチ
- 18 ザリブ・ドラッティ編『歴史遺産「幸福を与える智慧」I、II、III、IV、カシユガルウイグル出版社、一九八六年一月、カシユガル
- 19 マホメットイミン・ユスブ、アブリミティ・アハティ、バリジャン・ザパール編『偉大な学術的里程碑「幸福を与える智慧」』、新疆人民出版社、二〇〇七年八月、ウルムチ
- 20 新疆ウイグル自治区社会科学院編『幸福を与える智慧』研究論文集Ⅱ、新疆人民出版社、一九九三年七月、ウルムチ
- 21 郎櫻、『幸福を与える智慧』と東西方文明、新疆人民出版社、一九九二年四月、ウルムチ

- 22 ライハン・カディル、『東方智慧の千年探究』、民族出版社、二〇〇九年二月、北京。
- 23 李寧、『幸福を与える智慧』英訳研究、民族出版社、二〇一〇年八月、北京。
- 24 陳青萍、『幸福を与える智慧』——古代ウイグル人の健康智慧、中国社会科学出版社、二〇〇八年七月、北京
- 25 マホメット・トゥルソウン・ズヌン・オクヤ、『幸福を与える智慧のインデックス』、ウイグル語研究、二〇一二年二月、ロンドン
- 26 アブドゥシユクル・ムハンマド・イミン、『ファーラービーと彼の哲学体系』、新疆人民出版社、二〇〇四年三月、ウルムチ

(本学大学院博士後期課程・哲学)